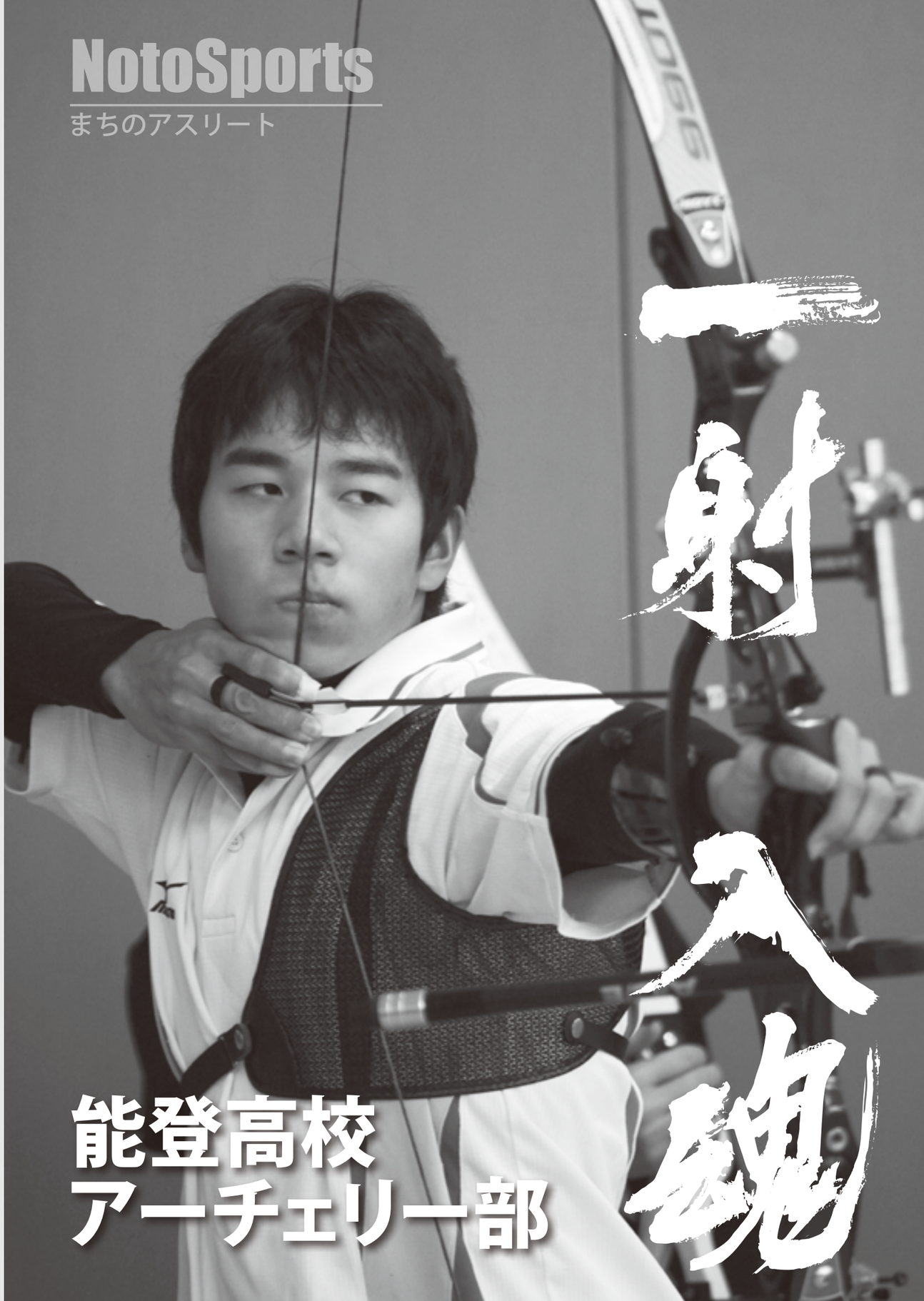

NotoSports
まちのアスリート

一射入魂
能登高校 アーチェリー部

Archery

アーチェリー
基本の「き」

【用具解説】
❶ハンドル❷リム＿弓の主流は３つに分解できるテイクダウンボウ。矢の速度は時速約 200 ㎞
❸弦＿軽くて強い化学繊維を 10 ～ 22 本をより合わせたもの
❹サイト（照準器）＿狙いを定めるもの
❺スタビライザー＿衝撃を吸収するもの
❻アームガード❼チェストガード
❽矢＿アルミ合金またはカーボンパイプのシャフトに樹脂系の羽根を付けたもの

弓は旧石器時代、狩猟の道具として発達したものが起こりといわれ、地中海（アーチェリー）、蒙古型（和弓）、ピンチ型（ボーガン）の３種類に分類される。

アーチェリー（洋弓）は武器として古代エジプトや中世イギリスで普及したが、鉄砲の出現と共に衰退。その後、スポーツとしてイギリス王室を中心に復活した。

競技形態は非常に多く、日本では①アウトドアターゲット②インドア③フィールド―の３つが盛んに行われている。

オリンピックや大きな競技会で実施される種目はアウトドアターゲット。その中にも①シングルラウンド（男子90、70、50、30㍍、女子70、60、50、30㍍）を各36射の合計１４４射１４４０点満点）②70㍍W（70㍍36射を２回。国体やインターハイの予選）③オリンピックラウンド（70㍍12射、大きな大会の決勝ラウンド、メダルがかかる対戦は交互に射る）―がルールとして分類できる。

ターゲット（的）の直径は１２２㌢。５色に区切られ10段階に点数が付けられる。

一本の矢を射るまでの動作（例）

スタンス（足踏み）｜セット（胴造り）｜ノッキング（矢つがえ）｜セットアップ（打ちおこし）｜ドローイング（引き分け）｜フルドロー（会）｜リリース（離れ）｜フォロースルー（残身）

伝統を受け継ぎながら新たな歴史を刻む――

平成3年の石川国体アーチェリー競技開催決定を機に柳田農業高校で産声を上げた「アーチェリー部」。能登青翔、能登高校と高校は変わっても、歴代の部員たちはアーチェリー部の伝統を受け継ぎ、歴史を刻み続けている。

練習場所の確保に奔走

平成21年4月、能登高校の誕生と共に、アーチェリー部も創部された。当初はアーチェリー場が整備されている能登青翔高校との合同練習。新入部員は、授業が終わってから先生の車や寮のバスで柳田へ走った。練習は午後5時過ぎから7時ごろまでの約2時間しか確保できない状況が続いた。

経験の浅い初心者は、一本でも多く矢を射ってフォームを固定することが重要だ。学校側は練習時間確保のため旧宇出津高校で練習できる環境を整えた。しかし、能都中学校の移転が決定。再び能登青翔高校で練習を行うことになった。

現在の部員数は2年生4人、1年生2人の計6人。冬期間は剣道場でインドア競技の練習を重ねている。

全国を目指せる競技

県内の高校アーチェリー部は現在、能登高校と金沢向陽高校の2校のみ。野球やサッカーのようにメジャーなスポーツではないため、両校とも部員の確保に苦労している。

競技人口が少ないゆえのメリットもある。高校から始めても北信越や国体、インターハイなど、大きな大会に出場するチャンスがあるのだ。

平成18年のインターハイでは能登青翔高校3年（当時）の池田浩太さんが準優勝。能登青翔アーチェリーの名を全国に響かせた。

能登高校となっても、西出智洋さん（2年）が県高校総体で個人優勝、角田初一さん（同）が北信越大会で2位になるなど好成績を残している。

アーチェリー場建設へ

指導する深見宣夫先生は「短い練習時間で上達するためには、生徒らの意識が大切」と話す。毎日の練習開始前、6人は大きな声で自分の目標を発表している。自分が立てた目標を常に意識して練習させるために取り入れたという。

現在、能登高校敷地内で念願のアーチェリー場建設が進んでいる。4月からは練習場所と時間という最大の課題が解消。矢を射る本数を増やし、必要な筋力トレーニングもできる。

意識改革をした6人と新入部員が、このアーチェリー場でどこまで伸びるのか楽しみだ。

建設が進む能登高校アーチェリー場。競技を実際に見てもらえることで部員数の確保も期待される。

【上段左から】
堂ヶ端亮太（地域創造科2年）
角田初一（地域創造科2年：副主将）
西出智洋（普通科2年：主将）
【中段左から】
上野智也（地域創造科1年）
大森亮太（地域創造科2年）
【下段】
紺谷亜樹（地域創造科1年）

Interview

金沢向陽高校 アーチェリー部顧問
山首一恵

愛知県出身。中京大学卒業後、柳田農業高校アーチェリー部を指導。石川国体では選手として団体2位、個人2位と活躍。

大学を卒業してすぐに石川県の教員になり、8年間柳田農業高校アーチェリー部を指導しました。指導者として私も一年生。国体開催も決まっていたため、生徒たちと一緒にやるしかないという状況でした。

当時の教え子たちが指導者としてアーチェリー部をつないでくれていることがうれしいですね。生徒たちには、「世界で戦う」という夢をもって頑張ってほしいと思います。

アーチェリー部 顧問
深見宣夫

柳田農業高校卒業後、日本体育大学へ進学。平成13年から能登青翔高校教員としてアーチェリー部を指導する。

アーチェリーは心技体の中でも「心」が大切な競技であり、生徒たちには日常生活が大切だと話しています。あいさつや礼儀、マナーをしっかりできることが人間性を高め、精神的にも強くなるのです。

自分に厳しくできる生徒、目標をもって、目的をもって練習できる生徒は伸びます。目標は「インターハイ優勝」。個人的には、ここから日本代表の選手を出したいですね。

アーチェリー部 顧問
濱出正彦

平成17年から能登青翔高校アーチェリー部顧問。21年4月から能登高校アーチェリー部顧問として創部から携わる。

アーチェリーは障害者も健常者も全く同じ条件で試合を行うスポーツです。マイナーではありますが、それゆえ高校から始めても大きな大会に出るチャンスがあります。

強豪であるソフトテニスと共に、アーチェリー部があるということは能登高校の大きな特色でもあります。アーチェリー場の完成を機に、部員数も増えてアーチェリーが盛り上がってくれればと思っています。

昨日の自分を超えれば
夢に一歩近づく
その手でつかみ取れ
一射入魂で

能登高校アーチェリー部

西出智洋主将

Nishide Tomohiro

「JAPAN」を目指す能登高生が、静岡の地で全国の強豪に挑む。

「自分のイメージどおり10点に入った瞬間は最高の気分です」とアーチェリーの魅力を語る西出智洋さん＝鶴町＝。主将として能登高校アチェリー部を引っ張るエースだ。

2月13日に柳田体育館で開催された石川県室内選手権大会で社会人、大学生に混じって堂々の初優勝。インドア競技で県内ナンバーワンとなった。

「調子は良かったし地元で勝ちたいと思っていました。合宿で深見先生から教わったメンタルトレーニングの成果が出てきたようです」と大会を振り返る西出さん。「アーチェリーは練習の成果が点数という結果に出るからやりがいがあります」と力強く語る。

陸上からアーチェリーへ

高校では、中学時代と同じ陸上部に入部するつもりだったという。たまたま友人に誘われてアーチェリー部を見学・体験し「楽しい」と感じた。

「陸上では県レベルが限界と感じていました。両親も『アーチェリーなら上を目指せるし悪くない』と賛成してくれたので入部を決めました」

入部当初の練習は、5メートルから徐々に距離を伸ばしていく。

「最初は5メートルもなかなか当たりません。30メートルをまともに打てるようになったのは夏休みの終わりでした」と当時を振り返る。

9月には両親と相談して自分の弓を購入。大学、社会人と生涯アーチェリーをやっていくことを決意し、さらに上を目指すようになった。

全国高校選抜大会に挑む

昨年11月の新人戦を制し、3月26日から静岡県で開催される全国高等学校アーチェリー選抜大会への出場を決めた。

「26位以内に入れば次の大会につながります。選抜大会で自己ベストを大きく更新し、上位入賞を果たすことが夢である日本代表への第一歩です」

アーチェリー競技は自分との戦い。常に上を目指す西出さんの弓は『JAPAN』という的を狙っている。